

令和8年4月24日

中標津町議会議長 後藤 一 男 様

中標津町議会議員 武 田 開 人

## 研 修 報 告 書

以下の研修について、次のとおり報告します。

- 1 研修名 新任時議員研修（市町村議会議員特別セミナー）
- 2 研修先 市町村職員中央研修所
- 3 研修日 令和8年4月20日（月）
- 4 研修事項 【講演1】13：30～15：00  
農業の新たなかたちへ  
株式会社和郷代表取締役 農事組合法人和郷園代表理事  
木内 博一 氏  
株式会社和郷 ナレッジバンク事業統括取締役  
高橋 義直 氏

### 5 成果

一般的な農業振興が「生産支援」にとどまりがちなか中で、本講演は農業を“食材製造業”として再定義し、収益構造そのものを設計する必要性を示した点に大きな特徴がある。生産・加工・流通・販売を一体で捉え、原価管理や販路戦略に基づき利益を確保するモデルは、従来の補助金中心の施策とは本質的に異なる。

また、規格外品の加工活用やDXによる効率化など、収益性を高める具体手法が示された点も実務的な価値が高い。

さらに注目すべきは、人材確保を「募集」ではなく「選考・育成・定着」まで含めたプロセスとして設計している点である。これは移住施策にも通じ、ミスマッチを防ぎながら持続的に人材を確保するための重要な視点である。

中標津町においても、課題は単なる担い手不足ではなく、販路の固定化や収益構造の弱さ、人材確保の仕組みの不十分さにあると考えられる。

今後は生産支援に加え、販売や付加価値創出まで踏み込んだ産業政策と、人材を呼び込み定着させる仕組みを一体的に設計する必要がある。

農業を“守る対象”から“稼ぐ産業”へと転換できるかが、地域の持続性を左右する鍵になると感じた。

3 研修日 令和8年4月20日（月）

4 研修事項 【講演2】15：15～16：45

これからの地方議会に求められるもの

～地域マネジメントの視点の重要性～

西南学院大学法学部教授 勢一 智子 氏

5 成果

本講演の特徴は、地方議会の役割を「監視」から「地域経営の意思決定主体」へと明確に引き上げている点にある。人口減少と資源制約が進む中で問題となるのは、単なるサービス水準の低下ではなく、「すべてを維持することが不可能になる構造」そのものである。この現実を前提にすれば、従来のように個別施策を積み上げる発想は限界に達しており、限られた財源・人材をどこに集中させるのかという判断、すなわち“何をやるか”を含めた意思決定こそが中核となる。

講演で示された「地域マネジメント」は、この選択と集中を実装するための考え方であり、農業、雇用、移住、福祉といった分野を縦割りで扱うのではなく、相互に関連するものとして再構築する視点を求めている。

例えば、担い手不足の問題は農業分野に閉じた課題ではなく、移住政策や雇用環境、教育環境とも密接に関わるものであり、本来は一体的に設計されるべきものである。にもかかわらず、多くの自治体では制度や組織の都合により分断されたままとなっている。

中標津町においても状況は同様であり、基幹産業である酪農を軸としながらも、人材確保、定住促進、産業振興が個別施策として展開されているのが実態である。

この構造のままでは、資源制約が強まる中で政策効果は分散し、結果として持続可能性を損なうリスクが高い。

今後求められるのは、将来像から逆算して政策体系を再設計し、分野横断で資源配分を最適化することである。

本講演を通じて得た最大の示唆は、議会の役割は「是非を判断する場」ではなく、「地域としての優先順位を決める場」にあるという点である。すなわち、住民の多様な要望をそのまま受け止めるのではなく、将来世代を見据えた上で取舍選択を行う責任を担う存在であるという認識である。厳しい選択を伴うからこそ、その過程を可視化し、説明責任を果たすことが、これからの議会に求められる本質的な機能であると感じた。

- 3 研修日 令和8年4月21日(火)
- 4 研修事項 【講演3】9:00~10:30  
生成AIは議会を変える  
～“補完する”価値、“決める”責任～  
青森大学社会学部教授 佐藤 淳 氏
- 5 成果

本講演の核心は、生成AIを導入すること自体ではなく、それによって「議会の質が上がるのか、それとも形骸化するのか」という分岐点にある点にある。従来、議員活動は情報収集や資料作成といった作業に多くの時間を費やしてきたが、生成AIの普及によりこの部分は急速に代替可能となる。問題は、その結果として生まれた時間を「より深く考えるために使うのか」、それとも「AIの出力をなぞるだけで終わるのか」という点にある。

講演で示された「認知の限界」や「限定合理性」は、この分岐を理解する上で重要な視点である。人間は本来、膨大な情報を処理しきれないが、生成AIを活用することで論点整理や多角的分析が可能となり、意思決定の精度を高めることができる。

一方で、分析の過程をAIに委ねきった場合、結論の妥当性を自ら検証する力が低下し、結果として「もっともらしいが中身の薄い政策」が量産されるリスクもある。

中標津町のように、人口減少や産業構造の変化に直面する地域では、政策判断の複雑性は今後さらに増していく。この状況下で生成AIを活用することは、もはや選択肢ではなく前提条件となる。

ただし重要なのは、AIによって効率化された「作業」と、人間が担うべき「意思決定」を明確に切り分けることである。現場感覚や住民との対話を伴わない分析は、いかに精緻でも実効性を持たない。

最終的に問われるのは、生成AIを使えるかどうかではなく、「何を問い、どこで判断するか」という議員自身の能力である。AIが普及するほど、知識量では差がつかなくなり、問いの質と責任の引き受け方こそが議会の価値を規定する。

生成AIは議会を強くも弱くもするが、その方向を決めるのはあくまで人間であるという点が、本講演の最も重要な示唆である。

3 研修日 令和8年4月21日(火)

4 研修事項 【講演4】10:45~12:15

「脳と習慣」の切り離せない関係

株式会社感性リサーチ代表取締役、人工知能研究者

黒川 伊保子 氏

## 5 成果

今回の講演は「脳と習慣」がテーマで、1歳の子どもを育てている自分としては共感できる部分が多かった。特に、睡眠や食事、生活リズムといった基本的な習慣が脳の状態に大きく影響するという話は、日々の子育ての中で実感していることと重なる部分が多いと感じた。

一方で、講演の内容をそのまま実践する難しさも感じた。例えば「早寝・早起き」や規則正しい生活リズムの重要性は理解できるが、実際には子どもの機嫌や体調、その日の出来事によって生活はどうしても不規則になりがちである。我が家でも、妻が子どもの様子に合わせて柔軟に対応してくれているが、その結果として生活リズムが崩れることもある。ただ、それも含めて無理に整えようとするより、子どもの状態を優先した自然な対応だと感じている。

また、「いきなりダメ出しをしない」というコミュニケーションの話も印象に残った。理屈では理解していても、忙しさや余裕のなさからつい強い言い方になってしまうことはあり、現実とのギャップを感じる部分でもある。ただ、少し意識するだけでも関わり方は変えられるのではないかと感じた。

全体として、講演の内容は非常に参考になるものであったが、理想通りに実践することよりも、日々の生活の中で無理のない範囲で取り入れていくことが大切だと感じた。子どもにとっても自分たちにとっても、負担にならない形で少しずつ習慣を整えていくことが、結果的に長く続く子育てにつながるのではないかと思う。

さらに議員としての立場で考えると、本講演の内容は家庭の問題にとどまらず、地域の子育て環境全体にも関わる視点であると感じた。子育ては各家庭の努力に委ねるだけでなく、保護者が無理なく生活リズムを整えられる環境づくりや、孤立を防ぐための地域でのつながりづくりが重要である。

今後は、家庭の実情に寄り添いながら、過度な負担を前提としない支援のあり方を検討していく必要があると感じた。